

Y I C看護福祉専門学校 令和4年度 第2回学校関係者評価委員会 議事録

日時：令和5年2月20日（月） 14：00～15：10

場所：5階カンファレンスルーム

出席者：委員

- A 高等学校 元教頭
- B 看護学科実習施設 副院長兼看護部長
- C 山口県介護福祉士会 会長
- D 介護福祉学科実習施設 施設長
- E YIC 看護福祉専門学校 介護福祉学科家族

欠席者：F 山口県看護協会 会長

G YIC 看護福祉専門学校 看護学科家族

出席者：学内

- H 校長
- I 副校長
- J 副校長
- K 事務長
- L 看護学科 学科長
- M 介護福祉学科 学科長
- 書記 看護学科教員

1. 校長挨拶

本日は皆さまお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。再来週には卒業式があります。今年入学時からコロナ禍で学校生活を送った学生が卒業となります。遠隔授業や学内実習など、課外活動が制限された学校生活だったと思います。3月16日からはマスクの着用が緩和され、5月には第5類に変われば、学校生活も変わってきます。それでも、すべてが前のままに戻ることはありません。コロナ禍で行われていた悪かったことを検討し、前に戻したほうが良いことは何か考えていかなければいけないと考えています。本日は、そのためにも忌憚のないご意見を頂きたい。

2. 議事

議長：委員長 A

【議題】

(1) 令和4年度学校自己点検・自己評価結果・・・資料I-1、資料I-2

I : 資料I-1、I-2をもとに説明した。

質疑応答

D 委員：「学生募集」について、ケーブルテレビを活用されたのは初めてだと思うが、反響はあったか。また、InstagramなどのSNSの反響はあるのか。

J : 一日に3回ほど流れたが、それを見ての問い合わせなどはなかった。

I : SNSによる発信は、「Instagramを見てオープンキャンパスにて来ました」などの反響がある。在校生も、フォローしており広がっていると思う。

K : 広報担当としては、以前活用したYouTubeは学内で撮影をしようとするのが時間がかかり、本年度は実施できなかった。学生がアクセスしやすいように、今後はHPからリンクをはるなどYIC本部の広報と連携をとり進めていきたい。

A 委員：最近の学生は、テレビを見ない。以前は、テレビコマーシャルを活用していたがそういう媒体から時代に合わせて広報活動を選んでいるのか。

K : 広報は、紙媒体などからSNSにシフトし予算の多くもWebに使っている。

B 委員：資料4ページの教員研修についてどのような内容をどのくらい行っているのか。

I : 夏・冬に3日間行っている。各10コースぐらいあり研修の対象も教員・管理者・事務・全員対象など様々である。内容も、教育に関連だけでなくマナーなどもある。

議題(1)について、全員一致で承認された。

(2) 令和4年度在校生アンケート結果・・・資料II

J : 資料IIにそって説明した。今後、YIC全体として卒業時アンケートや卒業後アンケートを検討していることを合わせて伝える。

質疑応答

D 委員:「家族や友人にもYICを勧めたい」という質問は、医療や福祉に興味を持たない人には勧めようがないので質問を変えたほうがよいのではないか。

A 委員: コロナ禍で環境が変わり同じ質問でも返答が変化する。来年は同じ質問をしてもまた変わる。結果をもとに新しいことを考えするのが目的なのでしっかり検討してもらいたい。

議題(2)について、全体一致で承認された。

3. その他

質疑応答

I : 介護福祉士を目指す学生が減り、学科や学校も減少している。福祉を目指す高校生はどのような進路を目指しているか。

A 委員: 現在コロナ感染の影響があり、その年度ごとに気持ちに変化している。自分としては、「人と関わりたい」と思っている学生が減ってはいない。ただ、現実的に働くとなると厳しい現場であるので進められない人が多くなっている。厳しい現実があると、社会に出てからでもよいのではないかと思う人が多いのではないか。学校で専門的な知識や技術が必要になり、卒業して働くことに不安になり進めない学生もいる。福祉科の学生もへり1クラスになっているが濃縮された学生になっていると思う。県内外を問わず変わらないのではないか。看護学科の学生はどうか。

I : 看護学生も親から影響を受けて希望する学生が多い。看護の魅力を小さい頃からみて志願する学生が多い。

A 委員: 看護・介護を目指す学生が、身近なひとから影響をうけることがほとんど。福祉を学んだ学生に、3年間福祉を勉強してよかったことを思うアンケートをとると9割がよかったと思っている。自分が成長できたと思う学生は、8割になる。人としてのやさしさや人間として成長できたと感じる学生はいる。毎年意識は変わっているので、学生に合わせていくのが課題になる。

D 委員: 介護士として働く子どもをみて、親が介護の現場に募集に来た例もある。中学生からの問い合わせが増えている。福祉科の優秀な学生に国家試験を受けさせる学校もある。

B 委員: 介護福祉の理解について授業を行っているが、両親が同じ職場で介護士として働いているという学生もいる。環境が良いと次の世代につながる。

D 委員: 兄弟や夫婦などが同じ職場で働く場合はある。よい環境であれば可能だと思う。マッチングは大切である。介護の職場のアピールが必要である。大変なことを乗り越えるからこそ、感動もある職業である。ネガティブな情報が多いのが残念である。結果を求められる職業で、ハードルはあるがやりがいがある。今までは、小規模な経営が多かったが、大規模な経営が増えてきた。大規模になることで人件費などに十分に充てる。職員に指導もできケアの質もあがる。専門職として質が担保されていくことで働ける職業になる。

H : 看護・介護ともに入学し、勉強にやりがいを感じている。家族に介護や看護にかかわる人がいると、入学のハードルを下げている、魅力を伝えることが私たちに必要だと思う。

A 委員: 福祉学科と高校、小学生と行った介護体験は大盛況だった。子どものころから介護などに興味を

もってもらえるように種をまくことしかできない。そのうち芽が出るかもしれないと思いながら続けていきたい。

J : 今回のイベント参加で、高校生が小学生を思いやりながら進める姿がよかったと思う。介護にもつながる体験だった。

E 委員 : (リーフレットについて) 専門学校で学べてよかったと思う。本人も私も思っている。私以上に知識があると思うことがある。経験不足による不安はあると思うが、これは経験しないとけない。いいことばかりの仕事ではないが、いい経験ができると思う。

その他 :

C 委員 : 看護師を目指すきっかけに、家族が同じような職業だったり、自分や身近な人の病気などの体験があったりする人が多い。社会性を身に着けながらなりたいことに努力する姿勢が必要になる。看護職は、不安や不満を個人情報の問題もあり、話をできる場所がない。自己を浄化する場所がなく、うつうつとしてしまう。吐き出したときに爆発してしまうので、気持ちを吐き出す場を作ることが私たちの役割かと思う。複数の入院が重なり、日ごろ手術だしをしない部署の看護師がやったことのない看護師と一緒にやろうとって頑張ったと聞いた。上からやれではなく、一緒にやろうとってくれたからがんばれたのではないかと思う。小さくても成功体験の積み重ねができたのではないか。不安に蓋をせずに、吐き出す、元気が出る方法や場を作っている。不安があるのは当たり前だが、仕事に誇りを持てるようにサポートがいる。職業人として誇りを持てる人を育てるには、吐き出す場を持つことが大切である。親などの家族も働いており、サポートは難しい。吐き出せるように関係性を作っていきたい。

A 委員 : 今の学生は、先輩の背中をみて育つことは難しい。失敗談などは先生もそうなのかと励みになる。

次回開催について

本年度の委員の方は、任期満了となる。次回開催は、10月を予定している。